

2017 年度【代 7 回】学生観光論文コンテスト

テーマ A：世界が訪れたいくなる観光立国ニッポンを目指して、私の提案

廃校を宿泊施設へ転用

～インバウンド客向けの「体・学・写」からの提案～

帝京大学 経済学部
河野ゼミナール 3 学年
米倉 寧音
小林 廣星
奥 達郎

目 次

I. はじめに

II. 宿泊施設の不足

1. インバウンド客の変動
2. 日本の現状

III. 廃校について

1. 廃校の現状
2. 廃校の増加理由
3. 廃校の活用
 - (1) 活用方法
 - (2) 宿泊費の削減
4. 廃校の活用事例
 - (1) 自然の宿 くす木
 - (2) 大三島ふるさと憩の家
 - (3) 泊まれる学校 さる小

IV. インバウンド客が求める文化体験の考察

1. 〈衣＝衣服〉
2. 〈食＝食事〉
3. 〈住＝居住〉

V. 調査結果

1. 長野県松川町
2. 課題と解決策
 - (1) 課題
 - (2) 解決策
3. 旧松川東小学校の活用例
 - (1) 文化体験
 - (2) 廃校周辺

VI. インスタグラムを用いたPR

1. インスタグラムの活用
2. インスタグラムを活用する理由
4. インスタグラムの活用事例

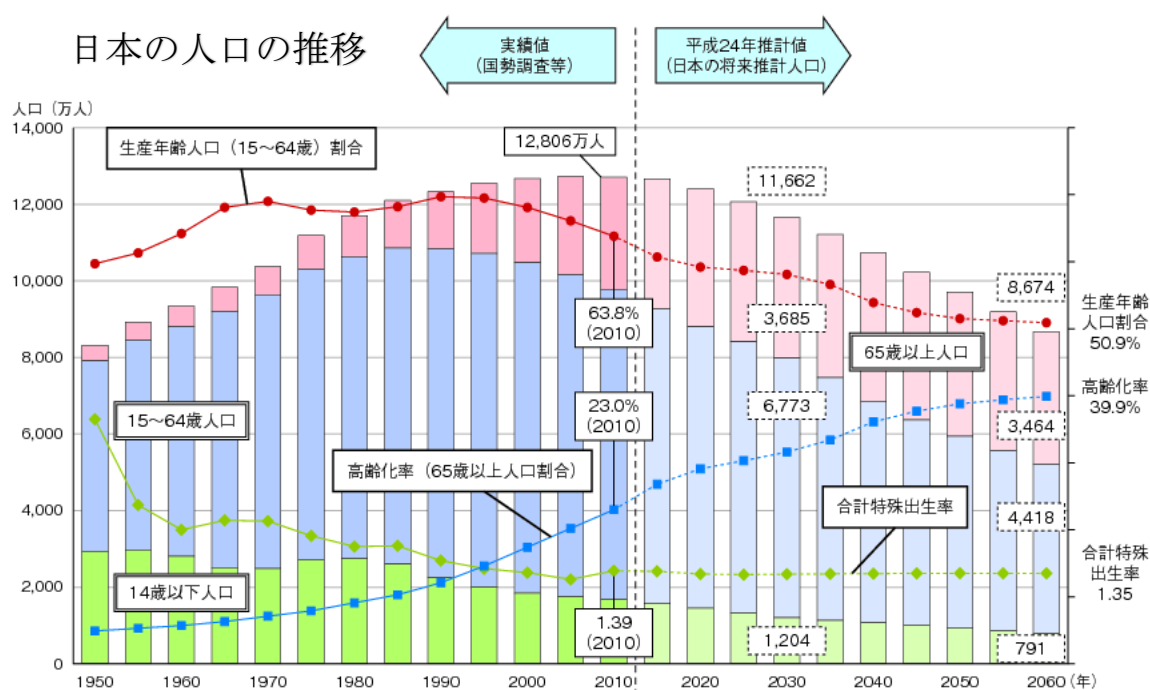
VII. 提案・まとめ

1. 提案
2. 体・学・写
 - (1) <体＝体験>
 - (2) <学＝学習>
 - (3) <写＝写真>
3. 旧松川東小学校でのプラン内容
4. まとめ

[参考文献・資料]

I. はじめに

本論文では、廃校を宿泊施設に転用することにより「地方過疎化」とインバウンド客による「宿泊施設不足」双方の問題を定義しながら解決策を提案する。



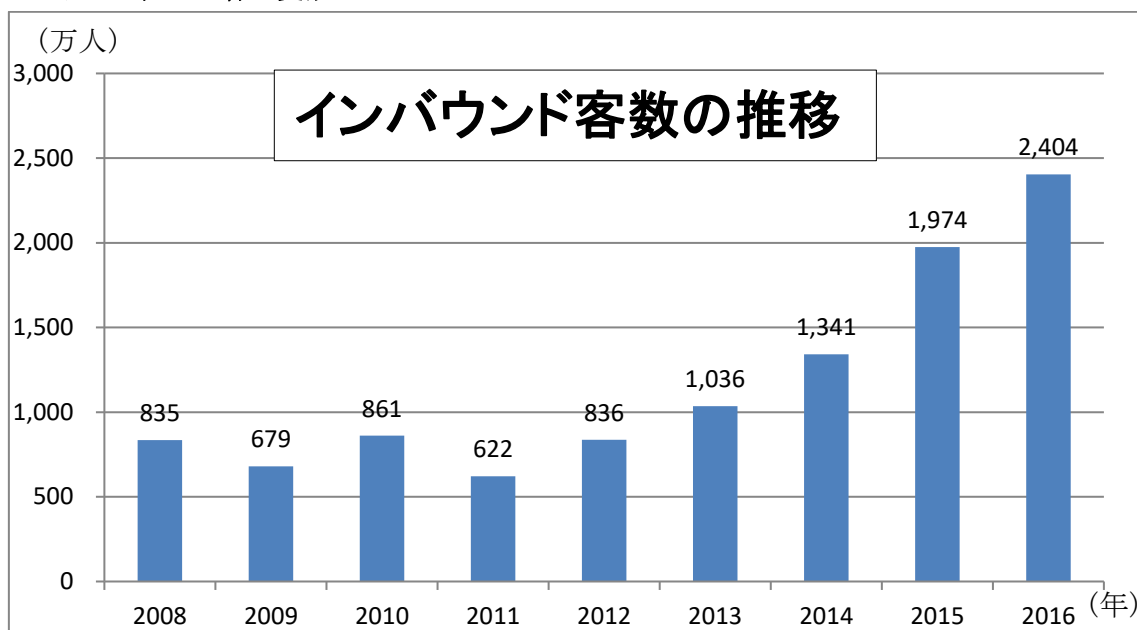
(資料1) 総務省HPより引用

(資料1)のように日本の総人口は減少を続けている。また、14歳以下の人口においてはより顕著に減少している。そのため、少子化による児童生徒数の減少や市町村合併などの影響により、多くの学校が廃校となっている。そこで、廃校を宿泊施設に転用することで現在日本が抱える宿泊施設の不足に対して解決の一手になると考える。政府は、東京オリンピックが開催される2020年にインバウンド客数4,000万人の集客を目標としている。また、インバウンド客の多くは主に目的地として主要都市に訪れる傾向がある。インバウンド客が主要都市に宿泊を考えた場合、宿泊施設が不足することは容易に考えられる。そこで、インバウンド客を「地方へ拡散」させることで宿泊施設不足を軽減させ廃校を有する地域では、廃校を宿泊施設へ転用する。これにより、「地方過疎化」「宿泊施設不足」という課題を解決する。

それにとまなうプランとしてインバウンド客には「コト消費」でもある日本文化体験を提供し、インバウンド客自身にインスタグラムで情報発信してもらうことによって、地方の魅力の発信と活性化を提案する。

Ⅱ. 宿泊施設の不足

1. インバウンド客の変動



(資料 2) 日本政府観光局 JNTO を基に著者が作成

政府観光局 JNTO の発表によると、2016 年にインバウンド客数は前年比 21.8% 増の 2,404 万と過去最高数値となった。

市場別にみると、中国は 600 万人、韓国は 500 万人、台湾は 400 万人を突破し香港を加えた 4 市場で前年比の 23.1% 増の 1,700 万人にのぼった。また、欧米や欧州からのインバウンド客も 300 万人を上回る規模になった。背景としてビザの緩和や免税となる物品の最低購入金額を「10,000 円以上」から「5,000 円以上」に引き下げたことが挙げられる。

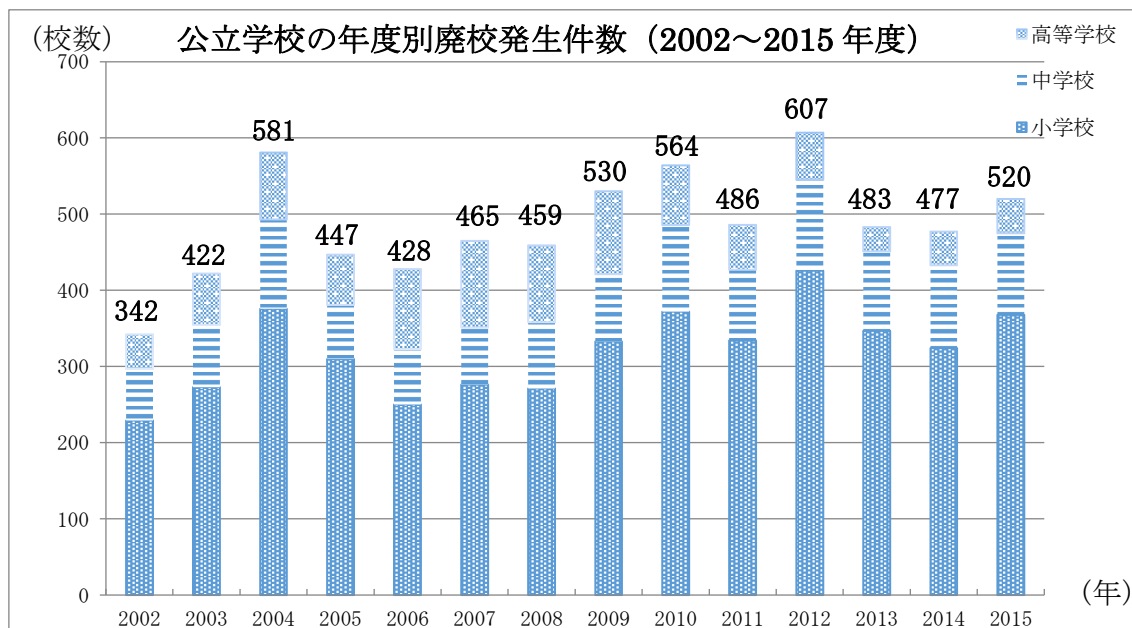
「消費税免税の拡充」をはじめ、政府が立て続けにインバウンド客の受け入れ策を行った結果、増加につながったと考えられる。

2. 日本の宿泊施設の現状

インバウンド客の増加が続くなか、宿泊施設の需要は大幅に増加しているため、日本における延べ宿泊者数については 2016 年時点で初めて 5 億人を突破した。そのうちインバウンド客の延べ宿泊者数は 6,600 万人を超え、全体の一割を占める結果となった。特に、2015 年時点で主要都市の宿泊施設の稼働率はそれぞれ東京 82.3%、大阪 85.2%、京都 71.4% と高水準になっている。そのため、今後も宿泊施設が不足するといった事態が予測できる。また、インバウンド客による宿泊施設の需要の増加により日本人のビジネスマンや出張客が宿泊できないといった問題も出てきている。この問題に対して、主要都市以外への誘致が今後のインバウンド客増加へ大きな対策になると考える。

Ⅲ. 廃校について

1. 廃校の現状



（資料 3） 文部科学省HPを基に著者が作成

2002 年度～2015 年度までの文部科学省の調査によると公立学校の廃校は 6,811 校のうち 5,943 校が現存し、そのうち 4,198 校が体育館や公民館、老人ホームなどに活用されている。残りの 1,745 校については活用されていない。また、（資料 3）から毎年約 500 校前後の学校が廃校になっていることがわかる。

2. 廃校の増加理由

近年、少子化による児童生徒数の減少、市町村合併などの影響により多くの学校が廃校となっているため、廃校の有効活用が求められている。しかし、現存する廃校のうち 1,745 校は活用されていない。その理由として、各地方公共団体において活用の検討がされているが「地域等からの要望がない」「活用用途がわからない」等の理由があり、各地方公共団体が活用用途の募集をしている。以上を踏まえて、（Ⅱ-2）で述べた対策として、廃校を宿泊施設として転用することは有益であると考えます。

3. 廃校の活用

（1）活用方法

廃校の取り壊しは多額の費用が掛かり、老朽化による治安の悪化や建物管理の問題が出てくる。しかし、廃校を取り壊すことよりも再活用することのほうが有効的であり、町の「思い出」や「文化」を守り続けることができると考える。このように、ハード面・ソフ

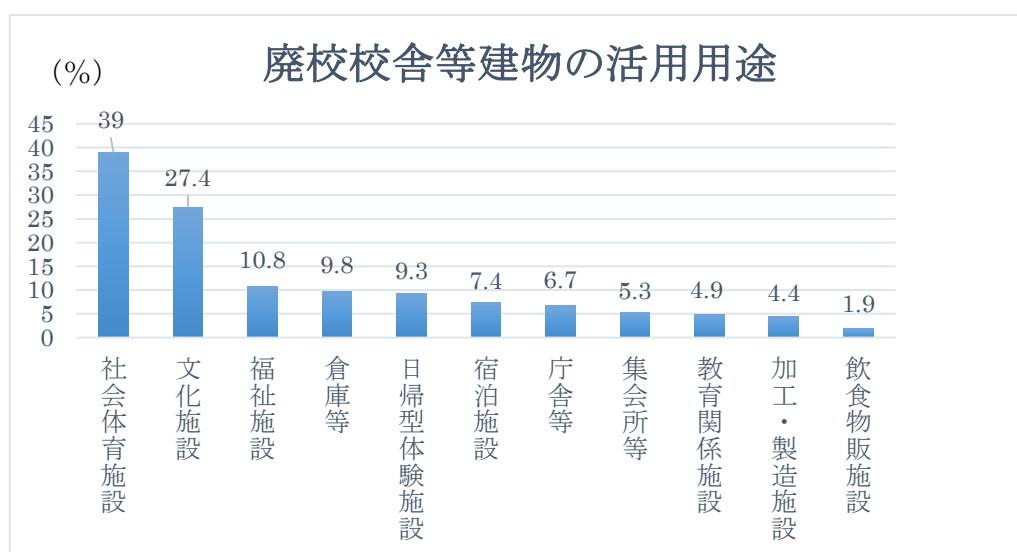
ト面から考慮をしても取り壊しは有益とは言い難い。そこで、廃校の活用方法として宿泊施設への転用を提案する。

(2) 宿泊費の削減

ホテルや旅館などに泊まる際に、問題視されている点がいくつかある。それは、「コストがかかる」「空き部屋がない」等である。対策として、廃校を宿泊施設として安価に提供することで宿泊費を削減し、学校の教室を宿泊部屋にすることで宿泊施設の不足に対する問題解決につながると考える。

4. 廃校の活用事例

実際に廃校の活用用途は下記のグラフのようにになっている。



(資料 4) 2008 年度都市農村交流技術的支援事業廃校活用調査を基に著作が作成

(資料 4) でわかるように廃校の活用用途はさまざまなものがあるが、「観光立国ニッポン」を目指すにあたり宿泊施設の不足が課題になるため、廃校活用の用途として宿泊施設の需要は今後高まっていくと考えられる。そこで、廃校の活用用途を以下で紹介する。

(1) 自然の宿 くすの木

「自然の宿 くすの木」(旧上三原小学校)は千葉県和田町にある宿泊施設である。1995 年に閉校し、宿泊型交流施設としてリニューアルした。自然のなかでの体験と交流を通じて、健全な保健と休養の場を与え、体力の向上と情操の高揚の必要な機会を提供し、地域復興に寄与することを目的としている。「自然の宿 くすの木」では体験事業としてふるさと料理バイキング・欲張りウォーキング・食事提供・各種イベントの出店・くすの木芸能まつり、周辺環境整備等の各種事業をおこなっている。また、和室畳(資料 6)10 畳が 6 室あり 48 名の宿泊が可能となっている。宿泊料金は 3,300 円～5,500 円で、2016 年の宿泊者数は 2,095 名であった。



(資料5)「校舎」



(資料6)「和室」

(文化科学者 HP より引用)

(2) 大三島ふるさと憩の家

「大三島ふるさと憩の家」(旧宗方小学校)は愛媛県大島町にある宿泊施設である。1986年に過疎化にともなう児童数の減少により閉校し、宿泊施設としてリニューアルした。海辺の廃校を利用した廃校施設で、沖に浮かぶ小島、南側に広がるきれいな砂浜と自然環境の相性はとても良い。海水浴やサイクリング等食べて遊べる観光ができる宿として学生や、家族旅行などで人気である。また、修学旅行の宿としても提供されている。客室は大小合わせて15室で70名ほどの宿泊が可能となっている。宿泊料金は4,000円～8,500円で2016年の宿泊者数は3,363名であった。



(資料7) デジタルシティえひめHPより引用

(3) 泊まれる学校 さる小

「泊まれる学校 さる小」は、群馬県利根郡みなかみ町相俣にあり、東京から約2時間のところに位置する。「みなかみ町廃校プロジェクト」の一環として2008年に少子化にともなう総廃合により廃校になった「猿ヶ京小学校」を再活用した施設である。「泊まれる・遊べる・学べる」を3つのポイントとして掲げる。「さる小」のグラウンドでは1年を通して野球やサッカーなど、夏季にはプールで水泳やカヌー体験、冬季には雪合戦を楽しむことができる。「さる小」周辺は豊かな自然に囲まれているため、星空観賞やバーベキュー、キャンプファイヤーなどが楽しめる。そして、都会に住んでいると、あまり見ることがで

きないきれいな星を眺めることができるという魅力がある。観光客の多くは合宿やイベント、キャンプ、体験学習などに利用している。

都市圏から比較的近距離でこのような体験ができることが、2016 年も抽選受付をするほどの絶大な人気を誇る理由であると考えられる。客室は 6 部屋で最大 120 名の宿泊が可能であり、宿泊料金は 3,300 円～4,500 円である。



(資料 8)「校舎」TABIZIN より引用

IV. インバウンド客が求める文化体験の考察

インバウンド客が求めている文化体験の基本は「衣・食・住」である。以下に文化体験の基本を紹介する。



(資料 9) 「浴衣」



(資料 10) 「浴衣」

(資料 9、10) 当ゼミナール教授により撮影

1. <衣＝衣服>

〈衣〉は、インバウンド客に着物や浴衣などを着てもらい、盆踊りや和太鼓などその地域の伝統的な踊りや祭りをを行う。例として、三重県伊賀市にある「忍者の里」のようにインバウンド客には忍者が人気なため、「忍者の里」に訪れたインバウンド客は年々上昇した。

その成果を踏まえ、本の景色・風景などを味わいつつ、各地域特有の祭りや文化を体験する際に着物や浴衣、衣装を着ることで衣文化を通して地域交流ができる。

2. <食＝食事>

〈食〉は、インバウンド客にりんごやみかんなどその地域の名物を楽しんでもらいながら、地域の住民と収穫から料理体験まですることで日本料理の魅力を深く知ってもらうことができる。その際、家庭科室や理科室を活用して体験することにより、日本にしかない思い出となる料理体験ができると考える。また、日本食を食べる際にアンケートを書いてもらい、アレルギーや宗教に合わせて料理を選ぶようにする。そして、秋は落ち葉を集めて焼き芋を焼くといった季節や行事ごとに合わせて地域の人達と交流をしながら楽しむことができると思う。

3. <住＝居住>

〈住〉は、教室を宿泊施設として活用するために泊まりに来るインバウンド客に「和室」の部屋を提供する。多くのインバウンド客は日本に観光に来ているにもかかわらず、「洋室」でベッドに寝る習慣があるためホテルなどに泊まっているのが現状である。そこで私たちは「和室」で布団を敷いて宿泊することにより、日本の文化を体験できるのではないかと考えた。また、夏では外でハンモックを使って星を見ながら就寝する。天候が悪いなど外で寝られない場合は、体育館を活用して間には仕切りを作りハンモックや布団を敷く。その際に、天井でプラネタリウムを鑑賞しながら就寝してもらう。

V. 調査結果

1. 長野県松川町

私たちが着目した旧松川東小学校は、長野県松川町にある。旧松川東小学校は近年まで利用され、2015年3月31日に全校児童数9名を最後に閉校した。な閉校後もサッカーの合宿場、地域のイベントなどにも使用されているためすぐに再活用が可能な状態となっている。校内は修復する必要があるほどきれいに保存されていた。また、洗濯機（資料12）や冷蔵庫（資料13）でわかるように宿泊に必要な設備が整っている。

体育館（資料14）ではレクリエーション施設としても使用が可能となっている。電気・ガス・水道も通すことが可能となっているため、設備を再活用するためのコストが削減される。さらに、教室にはテレビやストーブが設置されている。



（資料11）「長野県見取り図」松川町観光協会から引用



(資料 12) 洗濯機



(資料 13) 食堂

(資料 14) 体育館

(資料 12. 13. 14) は著者が現地にて撮影

2. 課題と解決策

(1) 課題

立地条件が悪く旧松川東小学校が山の中にあるため周りの道が入り組み、たどり着くのが困難で、車での移動は難しい。また、交通手段が乏しく徒歩や自転車では時間がかかり、バスが出ているが一日に数本のみとなっている。そして、学校の中には入浴施設がなくプール場にシャワー施設があるが冷水のみであるため、代用は難しいのが現状である。

(2) 解決策

小学校の通学バスを活用して最寄り駅から役所までの 2 ルートで学校までの送迎バスとして実施することができ、交通面で不便さを軽減させる。入浴に関しては、周辺の温泉施設へ案内し、学校にも仮設のシャワー室を用意する。以上の解決策をもって不便なく宿泊することが可能となる。

3. 旧松川東小学校の活用例

(1) 文化体験

旧松川東小学校の空き教室は、松川町の文化体験ができる教室として使うことで日本の授業を体験することができる。日本の四季の特徴や松川町の歴史や文化といった授業体験や、家庭科室や理科室を活用して地域の方々と料理体験ができる。また、就寝する教室を和室の部屋にすることで日本ならではの文化を味わえる。

(2) 廃校周辺

松川町には温泉があり、果物狩りなど自然豊かな町だ。そのような地域で農業体験やウォーキングすることで「非日常体験」や「リフレッシュ効果」を得られる。インバウンド客は日本の文化を体験することも大切である。また、自然を満喫することにより日本の文化と捉える。さらにチェックアウト時に周辺地域の飯田町や伊那市、天竜川でハイキングやカヌー川下り、妻籠宿等で文化体験できる場所を案内する。

VI. インスタグラム

1. インスタグラムの活用

インスタグラムのユーザー総数は、2017年9月時点で8億人を超えている。そのため、「インスタグラムでの投稿」というのは非常に大きな効果が期待できる誘客方法である。世界に多くのユーザーがいることにより、日本だけではなく、アルタイムで世界中に情報発信をすることができる。また、インバウンド客の写真の投稿は、今後ともインバウンド客を日本に呼び込む原動力となっていくと予測できることから、日本に訪れたインバウンド客による写真の投稿により、他のインバウンド客がその写真を見ることで、日本に興味を抱かせて日本への旅行をする動機に繋げることができる。

2. インスタグラムを活用する理由

2020年の東京オリンピックの開催に向けて、インバウンド客が増加することにより、「地方過疎化」「観光客増加による宿泊施設不足」といった問題を解決する際に、インスタグラムは非常に有効な手段だと考えられる。

インスタグラムを活用する理由は、簡単に写真を投稿することができ、#(ハッシュタグ)で相手がどの国でも関係なく、世界中の人が観覧できる。また、インバウンド客と日本人との間には言語の壁があるため、写真を投稿できるインスタグラムを活用することで解消されるからである。

そして、インバウンド客にインスタグラムを見てもらう最大の目的として、「日本の観光大使」として宣伝してもらうことが挙げられる。SNSの本質である、「閲覧したユーザーに何を体験してもらうか」を中心に、外国にはない日本独自の文化やインバウンド客が体験したくなるような写真をインスタグラムで投稿することにより、興味や関心を抱かせる。また、日本政府観光局でも、インスタグラムに期待する効果では、日本の新しい魅力の発信をするとともに「これまで観光地として日本を見てこなかった層へもリーチできる」と語っていることから、その地域の魅力を如何に発信し伝えることが重要だと考える。

3. インスタグラムの活用事例

マンガやアニメなどのいわゆる「クールジャパン」などの影響により、日本を訪れるインバウンド客の数が年々増加している。

日本を訪れる多くのインバウンド客が持っているのが「日本には侍や忍者がいる」というイメージがある。日本人にとっては「いつの時代の話だろう」と思われるイメージだが、インバウンド客の多くはそのままのイメージを持っている人が多い。日光江戸村では忍者や侍がいた時代を味わうことができる文化体験の場所がある。



(資料 15) 「日光江戸村」 STREET VIEW BLOG より引用

Ⅶ. 提案・まとめ

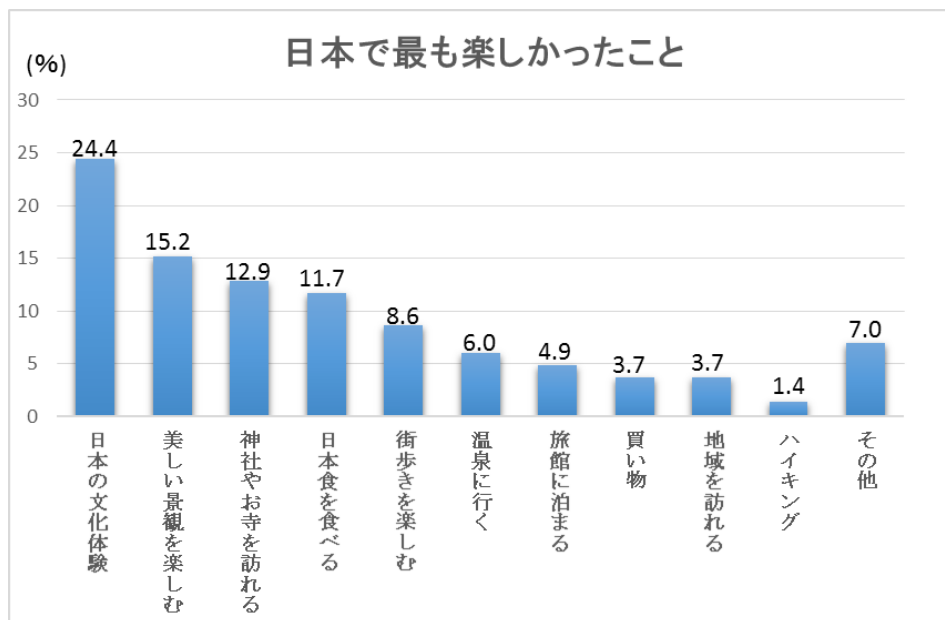
1. 提案

廃校は 6,811 校のうち 5,943 校が現存し、4,198 校は地域で活用されているが、残りの 1,745 校は活用されていないのが現状である。私たちは地域住民の「思い出」が多く残る学校が取り壊しになるのはⅢ-3(1)で述べたように、ハード面・ソフト面において、有益ではないと考える。そこで、廃校を宿泊施設へ転用することで「思い出の跡」を残しつつ、インバウンド客を誘致する観光スポットにすることで、「地域の活性化」を目指す。また、この提案をすることによって、新しく宿泊施設を建てるよりも地域のシンボルである学校を残し、発信することによってインバウンド客に対して日本の良き文化体験になると考える。現在、廃校を宿泊施設として活用しているがそれは地域住民に特化している施設が多い。

私たちはインバウンド客に特化した宿泊施設を提案することで主要都市をインバウンド客に宿泊してもらうのではなく、地方に宿泊させることにより、より深く日本の文化の魅力を体験できるのではないかと考える。また、地方に足を運んでもらうために宿泊費を抑えることも考えなければならない。Ⅲ-3(2)で述べたようにインバウンド客の日本での宿泊費の平均は 9,091 円となっておりその他に使う旅行費用も考えれば痛手になる。そこで、地方に足を運んでもらうために格安の料金と、宿泊費は 4,000 円から 6,000 円と考えている。廃校に足を運んでいただいた際に、四季折々の日本の文化を体験してもらう。具体的にはお花見や盆踊りなどの体験を取り入れる。さらに、地域特有の伝統文化を体験することによって地域住民との交流の場を増やし、地域の魅力を発信してもらうことで、観光の主要都市中心型から、地方への拡散を狙う。

2. 体・学・写

(Ⅳの1)の「衣・食・住」で紹介した日本を「観光立国ニッポン」にしていくための新しい項目として「～体・学・写～記憶に残る三つの項目」で考え、インバウンド客への新しい日本での観光形態を提供していく。



(資料16) JTB総合研究所の論文を基より著者が作成

(1)＜体＝体験＞



(資料17) 「しゅんしゅん傘踊り」鳥取市公式ウェブサイトより引用

日本全体でみてもさまざまな文化があるように県または市町村にも伝統的な文化がある。例を挙げると、阿波踊りやしゅんしゅん傘踊り(資料17)など有名な伝統文化だけでなく、

地方特有の文化があるためインバウンド客も新しい体験ができるのではないかと考える。日本での文化体験はインバウンド客にとって心に残る体験となり、リピーターの増加につながると考える。しかし、日本の有名な文化はインバウンド客も認知しているため、足を運ぶが認知度が低い伝統的な文化を有する地方は中々インバウンド客が足を運ばない。廃校を宿泊施設として活用していくことで地方にインバウンド客を呼び、双方にとって良い関係が築けるのではないかと考える。体験できる文化によるが体育館や運動場など観光客が広々と使える空間でおこなう。

ほかにも朝 6 時半にラジオ体操や朝夕で廃校周りをするることによって癒し効果で気分転換が出来ると考える。インバウンド客の方は日本のラジオ体操を体験させること、廃校周りを散歩することは日本での観光をもっと楽しく日本の四季折々の風景を感じられると考える。日本のように四季がある国は少なく自然の色々な顔が見られるが、インバウンド客は観光を目的としているため、ゆっくりと自然を満喫できないのではと考える。

(2)<学＝学習>

主に教室を使って日本の授業体験をしてもらう。日本と他国の学校を比較するとさまざまな違いがある。

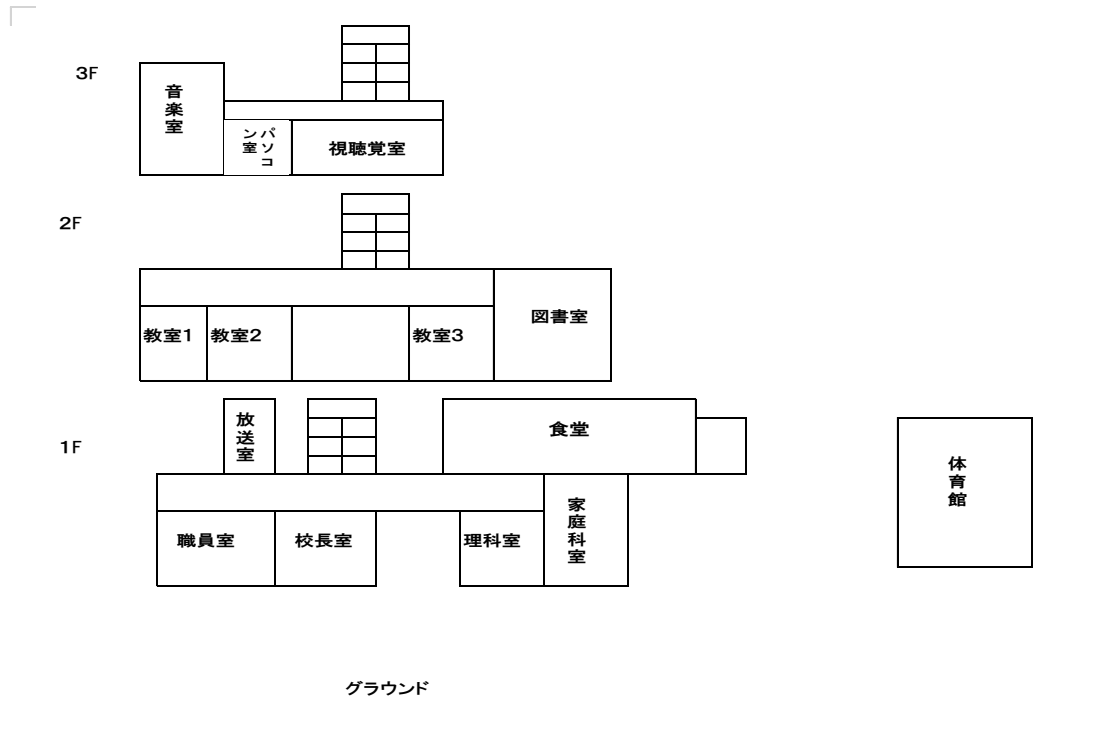
比較の例として、アメリカの学校には体育館やプールがなく、カフェテリア(給食)で食事をおこなうため、団体での食事をあまり取らないのが一般的である。さらに、上履きに履き替える習慣はなく運動会や文化祭もない。東南アジア地域の多くは、戦争などで学校というものが現存されていない。また、発展途上の都市部には設備が行き届いておらず、教育がまともにできていない学校がほとんどである。しかし、日本の廃校は昔からそのままの形の状態で現存している。インバウンド客からすると、昔から存在しているものは珍しく大変貴重なものであり、それを求めて日本へ観光に来るインバウンド客もいる。

日本は過疎化が進み廃校が増加しており、これからの日本を「観光立国ニッポン」にしていくためには廃校を宿泊施設へ転用していく必要がある。宿泊施設として活用していくことにより、インバウンド客向けの日本文化体験型の宿泊施設は珍しいと考える。そのため、一つの教室を使って日本の授業を体験してもらうことで文化や四季の特徴について学んでいく。

(3)<写＝写真>

ゲーム形式にしたり日本文化体験、料理体験の最中に写真を撮ったりすることでより記憶に残ると考える。ゲーム形式の具体例の一つとしてフォトコンテストを開きその日に撮った写真を見せ合い、お互いの写真を共有することで地域の人々や他の旅行者とも関係をもてる。ほかにもヒントをもとに校内を探索して宝探しゲーム等も家族連れから楽しめる行事である。写真を通して触れ合えることで日本人とインバウンド客それぞれの魅力を知ることによって新しい感性も体験できる。言語の壁があるため写真だからこそわかることが多い。

このように写真を共有することで、インバウンド客の人達を目線で体験したことや感じたこと、地域ならではの写真を並べて双方が新しい感性が知ることができる。これらを踏まえてインバウンド客に文化体験をおこなってもらい写真を自らインスタグラムに投稿してもらう。それにより、インバウンド客が多方面への情報発信が狙える。



(資料 18) 旧松川東小学校の見取り図を基に著者が作成

3. 旧松川東小学校でのプラン内容

2 で述べた「体・学・写」を基に旧松川東小学校でのプランを提案する。

「春のプラン」

	一日目		二日目
14 時	チェックイン	7 時	起床、森林浴
15 時	1 時間目 日本の春とは	8 時	朝食
16 時	2 時間目 花見	9 時	1 時間目 田植え体験
17 時	3 時間目 日本の生物や植物	10 時	2 時間目 ↓
18 時	地域からの食材調達	11 時	3 時間目 料理体験
19 時	夕食	12 時	給食体験
20 時	入浴	13 時	桜の前で記念撮影
21 時	夜桜鑑賞	14 時	フォトコンテスト結果発表 チェックアウト

春のプランでは、夜は夜桜を見ることで日本の風情をその場で感じることができるため、写真などを撮影できるようにする。翌日は地域住民と一緒に田植え体験を学び、その後は地域の郷土料理を作る授業をすることで昼食を作ることでより楽しめると考える。

「夏のプラン」

	一日目		二日目
14 時	チェックイン	7 時	起床、ラジオ体操
15 時	1 時間目 日本の夏とは	8 時	朝食
16 時	2 時間目 夏の特色	9 時	1 時間目 プール講座、川遊び
17 時	3 時間目 浴衣の着付け	10 時	2 時間目 ↓
18 時	地域からの食材調達	11 時	3 時間目 そば打ち体験
19 時	夕食	12 時	給食体験
20 時	盆踊り	13 時	自由時間
21 時	入浴	14 時	フォトコンテスト結果発表 チェックアウト

夏のプランは、夕食後にグラウンドに出て地域住民と「盆踊り」をする。翌日は、プールや川遊びをすることで日本の夏を感じることができる。そして、料理体験はそばを作るに当たり地域住民とそば打ちでの交流することで日本のおもてなしを体験してもらう。

「秋のプラン」

	一日目		二日目
14 時	チェックイン	7 時	起床
15 時	1 時間目 日本の秋とは	8 時	朝食
16 時	2 時間目 秋の特色	9 時	1 時間目 稲刈り
17 時	3 時間目 日本の文化祭	10 時	2 時間目 ↓
18 時	夕食、屋台飯	11 時	3 時間目 料理体験
19 時	↓	12 時	給食体験
20 時	入浴	13 時	フォトコンテスト結果発表 チェックアウト
21 時	ナイトウォーク	14 時	紅葉散策

秋のプランは、日本の「文化祭」を体験してもらい、焼きそばやお好み焼きなどの屋台飯を食べながら地域住民との交流できると考える。ナイトウォークは校舎の周りをウォーキングすることで夜の紅葉などを散策させる。翌日は、ご飯を食べた後稲刈りをしてもらうことにより、日本の秋がよりよく体験できると考える。また、チェックアウトした後は周辺の紅葉めぐりをしてもらう。

「冬のプラン」

	一日目		二日目
14 時	チェックイン	7 時	起床
15 時	1 時間目 日本の冬とは	8 時	朝食
16 時	2 時間目 冬の特色	9 時	1 時間目 餅つき
17 時	3 時間目 日本の星座	10 時	2 時間目 冬の文化体験
18 時	地域からの食材調達	11 時	3 時間目 ゲーム大会
19 時	夕食	12 時	給食体験
20 時	入浴	13 時	フォトコンテスト結果発表 チェックアウト
21 時	星空講習	14 時	地域の特産物めぐり

冬のプランは、日本の星空を楽しんでもらい、翌日は餅つきをしてもらうなど、昔ながらの風揚げや羽根つきを体験することにより、節分やひな祭りなどの行事を日本文化の体験としてできると考える。またゲーム形式にすることで、より盛り上がるできると考える。最後には表彰式を行い、順位が高い人に特産物を贈呈する。

プランの補足として、チェックアウト時に地域周辺の観光名所について案内する。そこで、「衣・食・住」も取り入れていくためには、運動場でお祭りや盆踊りをする際に、浴衣を着て日本のお祭りの体験や茶道で着物を着て体験をしてもらうことが重要だと考える。

また、班ごとに分かれて、候補のなかから夕食メニューを決めて、必要になる食材を各自で集める。その際に提携している農家の地図を渡し、食材を調達する。松川町は、公共交通機関・レンタルサイクル・コミュニティバスを活用して向かうこととする。農家では、畑仕事などの農作業を体験する。その対価として、食材を手に入れることができるという仕組みになっているため、夕食作りでは学校の調理室や家庭科室を活用する。

ごぼとん井（資料 19）のような地元で採れた新鮮な野菜や果物を自ら調理することにより、地産地消や日本食作りの体験にもなる。その際に、作ったレシピを帰り際に渡すことで帰国してからも日本料理の文化を味わえる。また、食材集めの段階で周辺地域に繰り出すことで、観光も兼ねた地域理解になると考える。上記のプランは漁村地域にも応用可能である。また、松川町のように地域町おこし隊に協力してもらうことにより、言葉の壁が少しでも解消できる。このようなことは、地域の協力・理解がなければ実現できないプランのため、「コミュニティの活性化」「雇用機会の創出」が地元地域の高齢者の活用にもつながる。

このように季節ごとに体験できるものを用意することでそれぞれの季節に対応する文化を学びより日本の文化について知っていただける。違う季節に再度訪れることで、「前に訪れたときとは違う」「新しい発見ができた」といった何度も訪れたいプランである。



(資料 19) ごぼとん丼 著者が撮影

2. まとめ

東京オリンピック開催の決定や「観光立国ニッポン」宣言、インバウンド客数 2,400 万人突破などの理由から、現在日本では観光分野がたいへん脚光を浴びている。また、私たちの提案は廃校を宿泊施設にするが、東京オリンピック以降でも継続した「インバウンド客増加」、および「地方への拡散」を達成するうえで、重要なものになってくるはずだ。日本における観光分野は、国際的に見るとまだまだ発展途上であるのにもかかわらず、経常収支に与える影響はすでに大きい。今現在は「モノ消費」が多くを占めていて「コト消費」が弱いために、日本が自国の文化や伝統を見つめ直し、インバウンド客のニーズをしっかりと把握したうえで観光促進を官民一体となり推し進めていくことができれば、日本の観光産業はさらなる発展を遂げ、日本経済の発展に寄与するにちがいないと考える。

さらに、観光産業の発展による雇用創出やインバウンド客増加による国内消費の増加および国際交流の活性化にもつながり、将来的に多くの廃校を宿泊施設に活用することができれば「廃校の活用用途」「宿泊施設の不足」の足りない部分を補い合うことができる。政府は成長戦略として「地方創生」政策を掲げ担当大臣も任命した。この「地方への外客誘客案」はその役割の一端を担えるに違いない。

[参考文献・資料]

- ・ インスタアンテナ
<http://insta-antenna.com/instagram-inbound/>
- ・ 国土交通省 平成 28 年版 観光白書
<http://www.mlit.go.jp/statistics/file000008.html>
- ・ COMPAS
https://compass-media.tokyo/interviewlist/instagram_unknownjapan/
- ・ 里の物語
<https://satomono.jp/school/12234/1791/>
- ・ 財団法人 都市農山漁村交流活性化機構 平成 20 年度都市農村交流技術的支援事業 廃校活用調査
<http://www.kouryu.or.jp/gt/pdf/h20haiko.pdf>
- ・ STREET VIEW BLOG より引用
http://l-s.co.jp/indoorview/blog/leisure/id_5118/
- ・ 総務省 H P
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc112120.html>
- ・ TABIZINE
<http://tabizine.jp/2014/08/27/17809/>
- ・ 鳥取しゃんしゃん祭公式サイト
tottori-shanshan.jp/
- ・ 日本政府観光局 JNTO
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/
- ・ 平成 20 年度都市農村交流技術的支援事業廃校活用調査
<http://www.kouryu.or.jp/gt/pdf/h20haiko.pdf>
- ・ 松川町役場（まちづくり政策課）
<http://www.matsukawa-town.jp/cms-sypher/www/common/detail.jsp?id=1878>
- ・ みずほ総合研究所 インバウンド観光と宿泊施設不足
<https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/pdf/insight/jp150810.pdf>
- ・ 文部科学省 H P
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/01/__icsFiles/afieldfile/2017/01/12/1353354_1_1_1.pdf
- ・ 文部科学省 H P
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401/50senn/16_ht/16.htm